

幽霊浮遊～実体のない幽霊に霊媒師は完敗イキ～



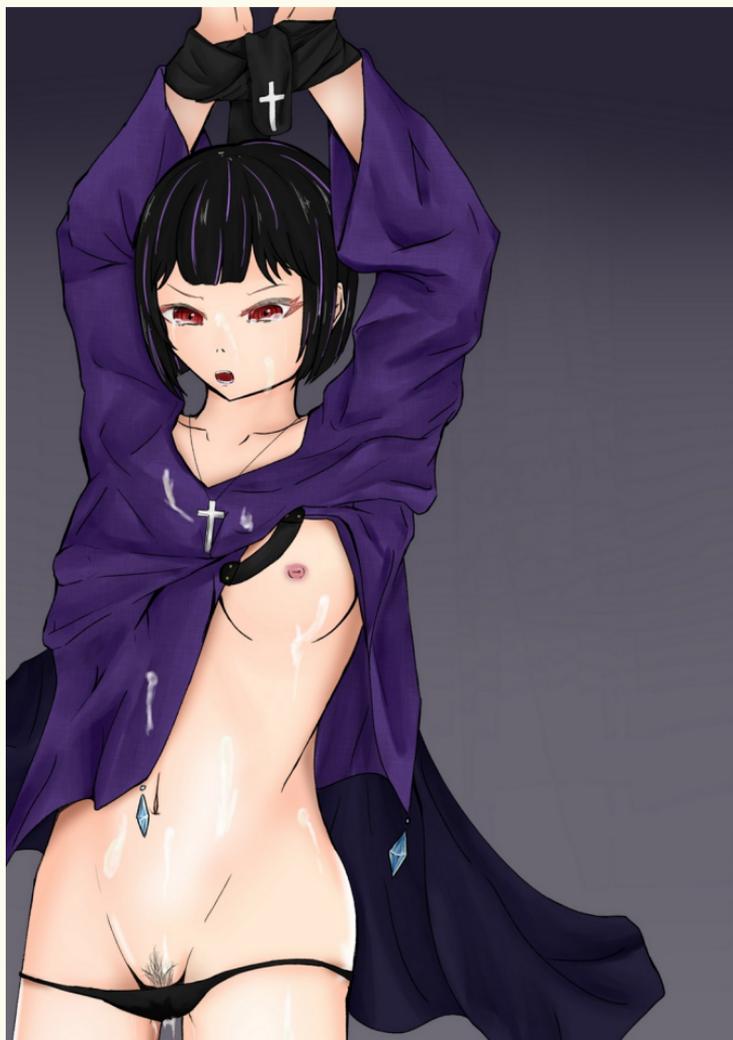
# 幽霊 浮遊

～実体のない幽霊に  
霊媒師は完敗イキ～

作者：トウエスイ

18

幽霊浮遊～実体のない幽霊に霊媒師は完敗イキ～



002

## キャラ紹介

池田 悠希  
いけだ はるき

社会人三年目。成績は平均よりは上で上司の人達からも信頼され、取引先との商談に行くように言われた。そして実際に取引先に行くと、相手方の女社員とサシで話す状況になり、そこでもっといい相手を見つけたからとこちらの手を切ろうとしてきた。必死に他の提案を並べているとその女社員にウザがられ、陥れられる。

それから時間が経ち幽霊になった彼は、その姿で仕返しをするための作戦を練る。

篠原 紬  
しのはら つむぎ

職業、霊媒師。霊媒師と言っても駆け出して研修期間を終え独りで心霊スポットや廃墟に出向き霊が住み着いていないか調べたり、靈感を上げるためだったり探検をする。その最中に悠希が住み着いていた廃旅館に訪れ彼と対面する。

そこで彼女は除霊しようと必死になるが、除霊には失敗してしまった。

あとがき	欲望を喰らいつくす	身体の求める快感	焦らし霊力	駆け出し霊媒師	目次
116	097	068	034	005	

## 駆け出し霊媒師

——俺は幽霊になった。

取引先の性悪女社員に嵌められ、取り引き中二人きりの空間でセクハラや痴漢の冤罪を掛けられた。

俺たちよりも後から来た取引先がいい話を持ってきたらしい。それでウチの会社との契約は破棄。

そんな事をされたら、会社の成績にも響いてしまう。必死に他の提案を並べ頭を下げる。

彼女はただダルそうに、一つ大きな溜息を吐いて「ウザ……」と小さく呟いた。椅子から立ち上がり俺の手を掴み上げると、スーツをパツパツに膨らませている。柔らかく豊満なおっぱいに俺の手のひらを乗せる。

「ッ！ な……」

突然の事に驚き言葉はこれ以上続かず、目まぐるしい速度で回る思考のまま状況

を整理しながら自身の手のひらが彼女の気持ちいい感触のおっぱいを触っているその一点をジッと見つけた。

その夢のような感触は一瞬で地獄への片道切符へと変わる。

彼女はそもそも俺の事が気に食わなかった様で、不敵な笑みを浮かべた後に大声を上げ、人を集めて俺がセクハラ発言をした後にペニスを露出して身体を触られそうになった。なんて駆け付けた人に真赤な嘘で助けを求めた。

彼女に無理やりとはいえ、彼女のスーツの胸元に皮脂など俺の手が触った痕跡が残って、俺の手にも彼女のスーツの繊維がくっついて言い逃れなどできないだろう。

そのまま取り押さえられ、俺を会社からクビにすることで大事にはしないという彼女の提案を、こちらの会社は受け入れ俺は職を失った。

さらには数百万を支払えと言われた挙句、なぜか負の噂はすぐに広がり近所の人からは軽蔑の冷たい視線を向けられる日々だ。

その辛さに耐えられなくなった俺は、その事件から一ヶ月で自ら命を絶った。

——そして俺は幽霊になった。

全てから逃げられると思ったのに、逃げる事が出来なかった。

これからどうしようかと悩む中に一つだけ変わらずに残っていた気持ちがある。

——あの性悪女に仕返しをしたい。

神様がいるのなら、その恨みを晴らしてこいと言ってくれているようにさえ思えた。

しかし一つ問題がある。

街行く人に触れようとしても触れられない。

肩を叩いて呼ぼうとしても、手を握って引き留めようとしても、綺麗なぷりっとしたお尻を撫でようとしても、通り抜けて触れることが出来なかった。

仕返しをしようにも、姿を見られない。触りも出来ない。声も届かないでは話にならない。

溜息を吐いて、大通りから少し中に入ったところにある廃墟となった旅館へ向かう。

幽霊になってからはそこで過ごしている。

服装は命を絶った時のスーツのズボンに白いカッターシャツだが、服の干渉はほとんどなく動きにくさは一つもなかった。

お腹は減らないし、喉も乾かない。

物に触ることも出来ず、暇をつぶすモノもなく、話す相手もない無の時間。

お金のプレッシャーを感じることも、時間に追われる感覚もないが、一言で言うてしまえば暇。

そういえば誰かが言っていた。一番の拷問は暇だと。

人を呪わば穴二つ——。神様がいるのなら、人を呪ったから地獄行きとして今罰を受けさせられているのだろうか。

そんな日々の中でも、唯一散歩だけは自由に出来て毎日ただ歩き回る。そして今日も陽が落ちて夜中の十時を超えた辺りから歩き出す。

ビルとビルの隙間。路地裏の方へ入って、生前には気づかなかった意外な近道を知ってテンションを上げていると、目の前の男の人と目が合った。

自然と意識が彼に向いてしまうオーラのようなモノを纏っている。

いや、目が合った気がしただけだろう。

今まで通り触ろうとすれば透けて、声を掛けても届きはしない。

何も気にせずそのまま路地裏を抜けようとした時に声を変えられた。

「兄ちゃん。アンタ、俺の事見えてる?」

「……ん!? お、俺……ですか?」

「おおー! その反応やっば死人か。霊気が弱弱しくてどっちか分からなかった」

「霊気、ですか?」

「霊としての力とか存在感みたいなもんだな。なんだ、色々知らない感じなら教えてやろうか?」

「えっと……」

「——実体持ちたいなら聞いて行って損はない」

「……実体というと?」

「今の兄ちゃんの霊氣的には、生きてる人達に声も届かず、触れもせず、見てももらえない。まあ、実体持って人驚かせて暇つぶしたいか? って話した。幽霊、暇だろ? それに、若い兄ちゃんにはいい話もある」

これは願ってもない話だ。

彼からしたら実体を得るという事は、暇つぶしの行為でしかないような口ぶりだが、俺からしたら性悪女社員に仕返しが出来ない原因が解消されるチャンスになる。どうせ終った人生だ。これ以上失うものもないだろう。

俺は彼に詳しく話を聞くことにした。

彼曰く、霊気とは存在感のようなものらしく、今の俺には靈感があっても見逃すほどの霊気しかなく、生きている人に見られる事はもちろん、触れることなど確実に出来ないという。

あがくにもあがく手段もない状態らしい。

それれその霊気が強まっていくと、物を落としてポルターガイスト現象で驚かせたり、耳元で囁いたり、悪ガキのような暇つぶしが出来るようになり、靈感がある人からは存在を認識できるようになる。

もっと増えると人に触れることが出来るようになり、肩を叩いたり、足首を掴んだり驚かせるバリエーションが増えるのかなんとか。

最終的には靈感が無くても認識されるようになり、生きている人との会話も出来るようになるらしい。

「それは分かったが、その霊気ってのはどうやって上げるんだ？」

「それが良い話って言った重要なところでな、簡単な話女とセックス——すればいい」

「セツ——！ いやいや、幽霊ってそういうのダメって聞いたことあるんだけど。生命を生み出す行為だから死者には、みたいなやつ」

「じゃあなんでラブホの心霊スポットがあんだ？ そしてその逆だ。死者が生命を生み出す行為をすることで生命力が霊力として身体に溜まっていく。生命力と霊力、生と死。表裏一体でどちらもどちらをも兼ね備えてる」

セックスという生命を生み出す行為は、霊からすれば死者の魂を輝かせる自身の生命力を補給する行為。

話を聞く限り、自慰では生命を生み出す行為ではないとのことで、一切霊力には関係ないらしく、射精をする事がトリガーではなく、セックスという生命を作る行為と、中出しという生命を宿す出来事が重要らしい。

難しいようで簡単な、ただ女とセックスすれば霊力が上がるという話。

だが、簡単そうだが根本的に不可能にしか聞こえない。

「人に触れないのに、どうやって女を犯すんだ？」

「一般人じゃダメだ。今言ったように触れないからな。だが一つ例外がある」

「例外と言うと？」

「霊媒師だよ。彼女たちはあちらの世界からこっちの世界に干渉してくる。だから

彼女たちには触れることが出来るんだ。まあ失敗すれば除霊されて幽霊人生も終って無の存在になっちゃうがな」

霊力の低い俺のような死人にはハイリスク・ハイリターンの賭けとなる。

霊力が低ければ除霊も簡単にされてしまうが、霊力が高ければ除霊にも手こずる上に、一定以上の霊力を上げれば一般人にも手を出せるようになり、除霊のできない一般人を犯すことで安全に霊力を上げることが出来る。

「このままだ暇な永遠とも言える幽霊人生を送り続けるか、消えることを覚悟して霊媒師を犯すか。どっちかだぜ兄ちゃん」

「その、足がついたりとか……デメリットはないのか？」

「中出ししようが何しようが、妊娠したケースは無いな。一回中出しされたからって霊媒師に位置情報が漏れる訳でもねえ。生き残ってる男の幽霊のほとんどは霊媒師犯してるやつがばっかりで嫌な目で見られることもねえ。たまに散歩が出来ればそれでいいってやつもいるが」

「……デメリットは無し、か」

「ああ、だがデメリットってか気を付けたほうがいい事で、霊媒師も俺たちがそうやって霊力を高めていることを知ってる。一人を囚にして違う霊媒師が除霊してく

ることもある」

彼は丁寧に霊力を上げる方法を教えてくれた。

結局幽霊になって楽しめるのも、いろんな女を犯せる事ぐらいらしい。

性病の心配もない。犯罪にもならない。安全に安心して犯せる。

女が理解できない表情で淫らな姿へと変わっていく姿が楽しいとか、昔浮気した女に仕返しをするだとか……。ただ一つ言えるとすれば、純愛は楽しめない事と、

こちらを認識できない故に、時に虚しさにも襲われる事もあるとか。

「とりあえず霊媒師を犯せばいいか……。だがそう簡単に見つかるのか？」

「新人の霊媒師は靈感を鍛えるために心霊スポットに顔を出すんだ。兄ちゃんは地縛霊じゃないなら心霊スポットに行くといい。ここら辺だと近くに廃旅館があるしそこで待てばいずれ来るだろうさ」

「多分そこ、俺が寝泊まりしてるところだ」

「じゃあ丁度いいな。ただ一つ……。霊媒師が二人の時はすぐ逃げた方がいい。なりたてほやほやの新人は師匠だったり実践経験の多い奴と一緒に周る。いわゆる研修期間のようなものだ。そして何度か除霊に成功し始めたら一人で周りはじめ一人前になれるように修行する」

狙い目は、研修期間を終えたが実戦経験の浅いコツも無ければ効率のいい動きも模索中の初心者、一人前になるために一人で動いている期間の霊媒師。

それはタイミング次第で運に任せるしかないらしい。

付け加えて、除霊の方法も霊媒師によって違っても教えてくれた。

お経を唱える人や御札を部屋に貼ったり霊にくっ付けたりして除霊する人とその手法は多様にある。

お経にしても御札にしても、腕を抑えながら膺を掻き乱せば身体は犯されている状況から逃げようと必死になり、声は揺れ、お経は喘ぎ声へと変わり、大抵は防くことが可能ということだ。

「あと持つておくと楽な知識としては、生命力の強い女を犯せば一回の増える霊力もまた増える」

生命力が強い女は、ゲームで経験値を倍落とす出会えたらラッキーな敵キャラ。

そして生命力の大半は性欲に比例しているらしく、出会えれば霊力は沢山増えてエッチな女にハメる事が出来る最高の相手という事だ。

「とりあえずはそんなところだ。俺は地縛霊みたいなもんでここ周辺から少ししか

動けない。聞きたいことがあったらこの辺りに来てくれ」

「分かった。助かったよ」

「おう、兄ちゃんもいい女捕まえて楽しめな」

幽霊の男と別れ、十五分ほど歩き普段過ぎしている廃旅館に着いた。——そして今の目的地でもある。

ここは俺が知らないだけで心霊スポットらしい……幽霊にあったことないけど。

幽霊になっても、生前と同じ様に見ることのできない幽霊もまたいるという事だろうか。

これからの事を整理すると、性悪女に仕返しをする前に、何人かの女を犯せばいいという簡単な話だ。

一番の鬼門は、一番最初にある。

霊力が低いからこそ、霊媒師もまたこちらを見つけにくい。

先手を打たれれば一瞬で除霊されてしまうだろう……。先手を打たれる前に犯す。……霊媒師、か。若くて可愛い子だといいな。……そもそも本当にここに来るの

だろうか。靈感を上げるために心霊スポットに行くと言っても、心霊スポットなんて他にもある。

ここを選ぶ確立も低いだろうし、その上、一人で動く駆け出し霊媒師という条件付き。

仕返しをするのは相当先になるかもしれないな……。

死んでから睡眠は必要としないが、思考の整理として寝ることも効果的だ。

しばらく寝るとしよう……。

……コン……コン……ギシ……。

静かな廃旅館の中から足音が響く。

硬そうな靴で床を軋ませながら俺のいる部屋に近づいてくる音が聞こえる。

その音で目を覚ました俺はドアが見える正面の壁際に立ち、乾いた空気が振動して広がる音に耳を済ませる。

足音は一人分。肝試しに来た人にしては静かすぎる。怯えている様な声でもなけ

れば足音も落ち着いているように聞こえる。

足を止める事もなく、迷いなく真つすぐと歩いている様に思えるが……こういう場所慣れているのだろうか……。

霊媒師なら慣れていても不思議ではないが……慣れている霊媒師だとすれば今の俺に勝ち目はない。

ただただ、とても静かなモノ好きが心霊スポットを散歩しているのか。

はたまた、一人前を目指す研修期間を終えた霊媒師が修行で訪れたのか。

それとも、玄人霊媒師が除霊のために派遣されたか。

……三分の一で幽霊人生を終える可能性もあるが、残りの二つは生き残る上に、駆け出し霊媒師だった場合は思うがままに犯して目的を果たせる。

一度窓から逃げるか……、ここで待ち伏せをするか……。

いや、待てよ……。よくよく考えたら玄人霊媒師が呼ばれるようなことはこの廃旅館では起きていないはずだ。

そう考えれば安全な二択だけが残る。油断すれば駆け出し霊媒師に消されるかも

しれないが、目的のためなら乗ってもいい賭けだ。

足音はどんどん近付く。

緊張しているのに自分の鼓動が聞こえないことに違和感を感じ、これから起きる出来事に、恐怖と期待が入り混じりアドレナリンがドクドクと身体中を巡る。

旅館の一室。そのドアが開くことなく隙間から人のような形をしている白い紙がスルスルと入り込んで来た。

かたしろ  
形代と呼ばれるもので、人型の紙を靈魂や神霊などの依り代とする。

元々形代は、焼いたりして事前に災いを防いだり、穢れを引き受けてくれる言わば身代わり。

そんな物が独りでに動き宙を舞っている……。

一般人には出来はしない。故に足音を鳴らしている相手は霊媒師で確定だろう。

俺が知らないだけで玄人の霊媒師がここに呼ばれるような事件が起きていて、玄人相手だったらどうしようかと、直前に嫌な想像をして怖気づいてしまう。

今思えば、玄人と駆け出しの見分け方を教えてもらってない事に気付いた。

あの性悪女に仕返しをするまでは消えられないというのに——ただ駆け出しであることを祈り続けるしか出来ない。

部屋に入ってきた形代は部屋の中で宙に浮いたまま動くことなく、ジツと留まっている。

この形代が今訪れている霊媒師の除霊道具だと思いが動きが無い。手段が思い浮かばないまま、足音はドアの前で止まった。

……古くなった蝶番がギイッと不気味な音を鳴らしながらゆっくりと開く。

「ここに入ったはずだけど……あ、あった」

ドアの奥、暗い影からは妖艶でありながらも凛としたクールな声が聞こえ、ゆっくりと月明りや街頭で照らされる室内へと土足のまま上がって来る。

足元から見えてくるその姿は、黒いウエッジソールのショートブーツから始まり、紫色のワンピースでスカート部分にはスリットと呼ばれる縦の切れ目が入って、そこからむちっとした太腿と黒いショートパンツが顔を覗かせる。

優しい肩を守る様に暗めのポンチョを羽織って、緩やかに膨らんでいる胸を強調するかのようにはソよりも上、胸下辺りに聖職者が肩に掛けるストラを和服の帯の様に巻いていた。

首元には十字架のネックレスを光らせ月明りに照らされた顔立ちは、声に見合った凛々しく澄んだ顔立ちをしている。

ストレートの艶のある黒髪ショートヘアに紫色のハイライトが混ざり、その瞳は赤くツンと目尻が上がり、こわくて蟲惑的なその視線に見つめられるだけで除霊されそうなほどに美しい。

彼女はその服装、ストラや十字架のネックレスを身に付けている辺りからも、霊媒師である事は一目瞭然だ。

問題はこの霊媒師が駆け出しか否か……。

「案内ありがと、休んでいいよ」

彼女は、この部屋に先に入って宙に留まっていた形代に手を伸ばし人差し指で触れると、小さく赤い炎が上がり燃えるというよりは焦げて灰になっていくように形代は姿を消した。

「この部屋に幽霊か……なるほど」

彼女は独りでそう呟くと、胸下に巻いているストラの隙間から形代を三枚取り出す。

扇の様に広げジツと見つめていると、先ほどまで見えなかった白い光の玉が形代の辺りで漂い始め、一枚に一つ、蛍光灯に引き寄せられる虫の様に入っていく。

風も吹いていないのにパタパタと音を立て形代は靡なびき、宙を舞い三か所に俺を囲

うように留まる。

形代に囲まれたら除霊されるという事かッ——！

俺は咄嗟に逃げようと右手にある窓から逃げようと走ると、形代は三体同士の距離を保ったまま俺を囲い続ける。

逃げられない追尾型……俺の幽霊人生はここで終るのか……。

「待ちなさい、それは除霊の術式ではないから。あなたの位置を知るためのモノ」

「何のために……、俺のことが見えてないのか……」

一枚の形代がクルッと彼女と目を合わせるかの様に前後向きを変える。

「ええ、あなたの霊力もまだ綺麗で微力なモノだし、今の私には見えない」

「綺麗で微力？」

「幽霊は特定のことをすると霊力が上がりますが、その行為は死んでも残り続ける靈魂を汚し、動くことも出来ない永遠の時間へと封印することになる」

特定の事というのが霊媒師とセックスをするという事だろう。流石に自分に害が及ぶかもしれないことは濁してきたか。

……動くことも出来ない永遠の時間。ただ歩き回るだけで暇だというのにそこに動くことも出来ないとは、地獄よりも地獄。そうなっては最悪だな。

——封印することになる。という言い回しからして霊媒師の手によって除霊というわけでもなく封印されるのだろう。

「そもそも、なんて俺の声が聞こえる」

俺の位置も形代で教えてもらっている状態で俺自身が見えているわけではない。ならば声が届くこともないはずだ。

「聞こえてはない。形代に教えてもらっているだけだよ。形代には人の形を保てなかった人間の霊、動物たちの霊の魂——よくオーブなんて言われるけど善良なオーブを形代に宿し、協力してもらおう代わりに天に魂を返してあげるんだ」

形代に集まっていた光はオーブで、その霊たちと彼女たちはお互いに助け合っているという。

「それで今から俺を除霊するってことか？」

「それを今から選ばせてあげる。あなたはまだ汚れていないし、人に見られないだけで身体は持っている。だったらこの世界を自由に動いて、見て聞いて楽しむことも出来る。そのあとに私のところに戻ってきて天に帰るといふ選択肢。でも一つ制約として人に触ることが出来なくなる術を掛ける」

「……そもそも、人には触れない……」

「その……霊感が強い相手になら触れたりするんだ。あなたたちが好きな人を驚かせたりする悪さが物理的に出来なくなるって事だ」

セックスが霊力を高めるといふ事を悟られないように、疑われにくい言葉選びで俺を誘導する。

「……他の選択肢は？」

「今ここでお祓いする。その二つだけ」

「……もし、俺の靈魂だっけ……それが汚れたら？」

「——痛めつけながら封印してあげる」

その瞬間彼女の凜々しい目は鋭く殺氣じみたモノになり、気温がグツと下がった。

「……」

「ごめんね。汚れた幽霊は殺してやりたいぐらい嫌いなんだ」

「そ、そうか……」

「で、どうする？ 旅をするかここで消えるか」

俺の目的は俺をハメた性悪女に仕返しをする事だ。

ここで人に触れなくなるとかいう、せつかくのチャンスを失うわけにはいかない。故に消える事もまた……。かと言って逃げられる雰囲気でもないなら、彼女に抗う

他無い。

「……………」

「……………」

彼女も返答を急かすことなく、静かに見守ってくれている冷たい時間が過ぎていく。

「まだ、俺は名前も知らないあなたの事が信頼しきれない……………」

「……………」それもそう、か。私は霊媒師、篠原<sup>しのはらつむぎ</sup>紬。まだ経験は浅いが技能は高い。

人に触れられなくなる術の手元が滑って、あなたをお祓いする事にはならないから安心してくれていい。…………その技能の高さは形代の操りで分かるだろう？」

霊媒師の彼女——紬は駆け出しであると自白してくれたが、技能への自信から不安は拭いきれない。

せめて除霊の方法を教えてくださいさえすれば策も思いつくだろうが、そんな事を聞けば答えられる前に消されてしまいそうだ。

「悩むとしても結局人には触れないようにするから、そっちの術は掛けることにす

るよ」

彼女は再びストラの中から形代を一枚取り出す、もう一枚くっついていたのかひらひらと地面に落ちていった。

「……ん、もう少し形代を携帯するためにも対策は必要か。ま、今はいいや」

紬はが形代を掴んでいると、彼女の胸の内側……心臓部分に青い炎が見えて、血管を流れるようにその炎は手に持つ形代へと流れ込み、白い形代は青く染まってくる。

「私の霊魂を使った形代。形代を経由して君に術を掛けるだけで、痛みはないから安心してくれ」

紬は俺に向かって弾くように形代を飛ばして来て、咄嗟にしゃがんで避けた。

「どうして避けるんだ？ 人に触れられなくてもあなたに不利益はないだろう」

「勝手に決めるな。俺にはやることがあるんだ」

「……そう、あまり良くない事な気がするし、あなたを消すとするよ。ごめんね」

彼女が飛ばした形代は焦げて灰へ変わり、新たに一枚形代を取り出し先ほどと同じように青い炎——紬の口ぶりからして彼女の霊魂が流し込まれる。

先ほど飛ばした形代が消えたあたり、術ごとに形代を変える必要でもあるのか、

靈魂を染みこませた形代は一枚ずつしか使えないのか……何かしらの欠点はあると思うだ。

彼女は同じように青い形代を俺の方に飛ばすが、避けられない速度ではない。

「逃げてても無駄だよ。君の位置は形代が教えてくれるし、私の術はずっとあなたを追いかける」

追いかける？ そんな術が使えて駆け出したと？ ……それが本当なら確かに玄人には敵わないだろうな。

所詮は紙だ。燃やすか水に濡らすか出来れば……………。

外は雨も降っていない綺麗な夜空を映し出し、燃やすものなど何処にもない。

何か、この旅館の中で出来る事……キツチンまでいけるか？ いや、水道もガスも使えるか分からないし、まず彼女が俺を外に逃がすことは考えにくい。

だとすれば部屋の中で何か……………。

俺は青い形代から逃げ回りながら部屋の中を逃げ回りながら、隅々まで何か使えるようなモノを探す。

……—！ あった……使えるかは分からないが……一つだけ、可能性がゼロでないモノがあった。

——紬が落としてしまっていた使われていない形代。

原理は勝手に彼女が教えてくれた。俺だって幽霊なんだ……言ってしまうえば同胞のよな存在。上手くすれば使えるかもしれない。

モノに触れられずとも、こちらに干渉するための道具になら……。

そんな小さな希望で地面に落ちている形代に手を伸ばす。

久しく感じる人差し指にモノが当たる感覚、紙の擦れる音と指先の感覚に感動を覚えながらその形代を掴み上げる。

「君が使えるのか!？」

彼女は駆け出しとは思えないほどの反応速度で新しく形代を取り出そうとするが、反応速度と冷静さはまた別もの……また三枚ほど地面に落としてしまいなながらも、三体のオーブに協力してもらい新たに形代を三体と、自らの靈魂を流し込んだ青い形代二体を俺に向けて飛ばす。

彼女が青い形代を作る度に、彼女自身の靈魂の炎が弱くなっている。

「ここにいる霊全員が女にいい所見せたいだけじゃないだろ! エロい女見たい奴

は俺に協力してくれ！」

彼女が放った形代は俺が奪った形代を取り返そうという動きの中、俺の手に持った形代の周りに黒いオーブが集まって形代は独りで飛び、元々追いかけていた青い形代とぶつかりどちらも燃えて消えていった。

「ダメだ、これ以上術は使えないんだ。お願い、皆協力して」

紬の術は自らの靈魂に掛けたい術を念じながら形代に注ぐ事で簡単に強力だが、靈魂を削ることで可能とする術のせいで、沢山は使えないというデメリット付きという事らしい。

地面に落ちた三枚を使えば、後の追ってくる二枚の青い形代からは逃げられるということだ。

そう分かった俺は死に物狂いで形代を拾い上げ再び黒いオーブに協力を求める。

「位置の情報はもう大丈夫。皆で相手に形代を使わせないように邪魔をして」  
彼女のその指示は遅く、既に三枚とも俺が使役出来ていた。

後は二体の青い形代を燃やすだけ——

俺と霊媒師の戦いでありながらも、この空間にいる身体を持たない幽霊たちのプライドを掛けた戦い。

女を守るカッコいい霊でありたいか、欲望のままに女の淫らな姿を見たい霊になりたいか。

どちらのプライドも分かるが、俺が勝ったら実体を手に入れるために紬をもちろん犯すつもりだが、俺が負けたら俺の存在が消えるんだ。——負けられるモノか。

俺の使う一体の形代は、彼女の使役する形代とぶつかり青い形代を燃やすことが出来なかったが、もう一体で青い形代を燃やすことに成功した。

あと俺が使えるのは一体だけ。彼女は五体の使役する形代と一体の青い形代。圧倒的不利だが、ただ使役している形代に触れたところで問題ない。

俺が使役している形代が、燃やされないように青い形代を燃やせばいいだけだ。

次第に紬は俺の使役する形代から青い形代を逃がすことに集中して、俺の位置を教える形代も目的が変わっていたおかげで俺の位置を把握できていない。

彼女にゆっくりと近づき目の前に立っても俺には気付いていないようだった。

どれだけ霊気が弱いんだ……だがそれも今だけの事で、これから十分に霊気を強化してやる。

早速彼女の緩やかに膨らんでいる胸を触りながら、巻いているストラを解く。

「ヒヤッ——いつの間にッ」

突然の出来事に予想外の可愛らしい声を漏らした直後には、鋭い視線へと豹変した。

ストラを外したことで仕込んでいた大量の形代は床に踊りながら落ち、その中の何枚かを使役して袖側の形代と全て相殺させることに成功した。

彼女の両手を固定させながら床に押し倒す。

「ツ……さっさと消しておけばよかった」

俺側の生き残った形代を使って、彼女がやっていたように言葉を伝えるようにお願いする。

「俺も目的のために必死なんだ。あの女に仕返しをするまでは消されるわけにはいなくてな」

「あなたに事情があっても、私の仕事はあなた達を消すことで、私は人に危害を加える幽霊が嫌いなんだ」

彼女は俺の位置も分からなまま、腕を抑えられてる角度から俺の顔を見て、お互いにジツとじら見合う。

床に落ちている形代に触れられた瞬間に俺の負けになるだろう。

まだ安心できない……どうするべきか……。

視界の端に、先ほど解いたストラが落ちている所が目に入った。

空いている手を伸ばしストラを手に取り、彼女の腕を縛る。

霊媒師が身につけているモノや、霊媒師本人を触れていることに感動を覚える暇もなく、緊迫した時間が過ぎていく。

改めて彼女の顔や体をまじまじと見ると、顔立ちは端麗で美しく、赤く凜として  
いる瞳は麗しくたおやかだ。

口元にはピンクのリップを塗り色気が漂うぷっくりと艶のある唇。

黒髪も艶やかに輝き紫のハイライトが彼女らしさを際立たせクールにまとまっている。

下の方へ視線を移すと首筋は滑らかで艶のあるきめ細やかな肌をしていて、健康的で鎖骨からは色気が漂う。

緩やかに膨らんでいるCカップ程の胸からワンピースのしわから美しい身体ラインが想像できる。

ワンピースのスリット部分からチラ見えする太腿はむちっと弾力のありそうな膨らみを保って全身から妖艶さが滲みでていて、彼女と争っていた直後とは思えないほどに性欲を擦くすぐられていた。

体験版はここまでとなります。

製品版では挿絵のアリナシどちらのファイルもありますので、気になったら是非宜しくお願いします。

この作品、パーツの転載、複製、配布を禁止します。

サークル青。 トウエスイ

Twitter [https://twitter.com/freeco\\_009](https://twitter.com/freeco_009)